

東京バッハ合唱団 月報

[第 714 号] 2021 年 12 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.714

December 2021

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

それでも新年を迎える

私達の「東京バッハ合唱団」にとって、今年 2021 年は、どんな年だったのでしょうか？

まず公開の大規模演奏会は、定期演奏会をはじめ、1 度もなく、辛うじて 10 月 2 日の特別演奏会（聴衆限定 12 名のため、荻窪教会）が実現しただけでした。もっぱらコロナ禍蔓延のせいで、計画していた大ホールでの演奏が、どれもこれもキャンセルとなった結果だったのです。1962 年発足以来の異常な年となりました。

したがって、通常の団員募集の具体的な希望も叶わず、少人数の団員と、これまたかなり縮小した後援会の方々との忍耐で、なんとか切りぬけてきたところです。見通しもやはり、コロナ禍の終息がいつになるかにかかっています。その期間中、私達は団の存在価値を忘れることなく、華々しい大ホールでのアピールは出来ないまでも、月報その他の手段の利用を考えて、バッハ・カンタータ演奏の意義を、世に訴えつづけてゆく努力を怠らないよう、より熱心に動かなければならないでしょう。

さいわい、団員数は減っても、ソプラノ・アルト・テノール・バスの各パートに、核となる根っこは健在しつづけています。何度でも上演したくなる魅力満載のモテットなどは、ソプラノ声部を 2 倍要する編成のため、いまは実現不可能ですが、他のほとんどの作品では、バランスを崩さずにとり組むことができたので、大いに感謝しています。

今年唯一のコンサート（上述）は、先月号でのご報告のとおり、それはそれで愛らしい結果を生み出して、このような在り方も、新しく発見することができました。けれども、これまでの定期演奏会には、日本列島の津々浦々、北海道から九州までの愛好家の方々のご



■白馬岩岳からの雪景色（長野県白馬）[撮影・千葉光雄]

来聴をいただいて、盛り上がったステージをつくり上げられたのでした。

日本は、まだまだバッハの真価が一般に受け入れられていない、その面では未開の地なので、私達はどんな苦境に出くわしても、がっかりせずに、大きな効果に逆転させる任務は自分たちにあるとしっかり心得て、ひたすらプラスになる目標に目を見開きながら、また新しい年を迎えましょう。

大村 恵美子（主宰者）

道で初めて出会う人も、みな〈友だち〉

大村 恵美子

この人は、いつも同じことばかり書くんだなと、思われるかも知れません。そうなのです。毎日、ニュースを見聞すると、私のほうも、つまりは、人間というものは、同じ理由から問題を起こすのだな、と思えるからです。

人間は〈ひと〉という、個立的なものではなく、〈人間〉という、自己+他者、その双方の関係から成り立っている存在だからです。この文章も、なるべく手短かに訴えたいのですが、結論を先に出すと、「自分を先に通すか、相手を先に通して自分はあとに譲るか」の第 1 問題から、ほとんどのニュースが始まっています。

国際的な貿易問題も、地域紛争も、すぐ〈攻撃〉〈防衛〉の注意が絡んできます。あの国がこう言った、あの国がこう動いた、というニュースの内容は、「だからけしからん」「だから、親しくしてもいい」のどちらかで、自分の態度をきめる理由になります。

私は、こども達の生活を観察し、ああ、自分にもあいうことがあったな、あの反対に出ればよかったのでは、とか、色々比較してみることが多いのですが、〈おとな〉といえども〈こども〉の域を出ない人もけっこう多く、それで引かかるのです。

新聞やテレビで〈おとな〉の重要問題として一面記事に大きく取り上げられるようなものでも、つまりは〈こども〉だということになるのでは、と考えてみるだけで、感情的にのめり込んで国交断絶とか、防衛費

月報 2021 年 12 月号 CONTENTS

- ・バッハ・カンタータの場景 BWV 1（大村健二）…p. 2-3
- ・拝啓 安曇野閑人様（風岡和子）…p. 3
- ・連載：退屈するのはいそがしい [10]（大野博人）…p. 4

バッハ・カンタータの情景 №7

大村 健二 (団員)

創立 60 周年記念公演の曲目 (2)

- ・BWV 21 《われは 憂いに沈みぬ》 三位一体節第 3 日曜日
- BWV 1 《あしたに輝く たえなる星よ》 マリアの受胎告知の祝日
- ・BWV 147 《心と日々のわざもて》 マリアのエリサベト訪問の祝日

聖母マリアに捧げるバッハの作品 (上)

来年に迎える創立 60 周年の記念公演 (5 月、左段下に予告) には、上掲の 3 曲を取りあげます。先月号で BWV 21 をご紹介しましたので、今回からは残りの 2 曲を見てみましょう。

期せずして、聖母マリアの祝日用カンタータが重なりましたが、われわれの記念祝賀にふさわしい華やかさ、という点でたまたま選曲された、という経緯には前回触れました。

ご存じのとおり、プロテスタント教会では、イエスの母マリアを聖人としては扱いません。ローマカトリック教会が、年間をとおして「聖母マリア」の祝祭日や記念日を祝っているのは対照的です。

ですから、プロテスタント教会の作曲家である J.S. バッハが、ここで取りあげる 2 曲のカンタータを含め、マリアの祝日用の作品を数多く残していることは意外に感じるかも知れません (下記)。

潔めの祝日 (2/2) 用……BWV 82, 83, 125, 200

受胎告知の祝日 (3/25) 用……BWV 1, 182

エリサベト訪問の祝日 (7/2) 用……BWV 10, 147

ほかに、マリアの (神に対する) 賛歌《マニフィカト》BWV 243 もあります。

バッハの生きた 18 世紀ドイツの福音派プロテスタント教会は、その祖たるマルティーン・ルターの音楽観を受け継いで、われわれの想像以上に、宗教改革以前の教会音楽様式を保持していました。バッハにも、晩年の《ロ短調ミサ曲》への取り組みは別格ですが、礼拝用の仕事として、ラテン語によるキリエとグロリアのみの短いミサ曲 (われわれも数曲を上演しました) やサンクトゥスなどの伝統的な音楽がかなりあります。

しかしここでは、職業上の務めとしての出来栄を越えての魅力をお伝えしなければなりません。それがバッハの音楽にとっては、共通の大前提です。上に掲げた作品群の多くは、われわれも何度か取りあげ、そのたびに、情感の濃さ、完成度の高さに驚かされたものです。作曲者バッハの、マリアへの想いの熱さを感じずにはおれませんでした。最初の妻の急逝が、彼に無伴奏ヴァイオリン作品の高みを与えた、という論があります。彼女の名前にも“マリア”が含まれます。

倍増とか、そういう〈おおごと〉になるのはおかしいと、気を取り直すことができるのでは? という立場だからです。

ここでは、〈おとな〉の様々な小むずかしい重要紛争などを思い出すよりも、むしろ私たちがすでによく経験したことのある〈こども〉のいざこざを思い出し、試みることにしましょう。

◇ 知人のこどもと連れだって町に出て、その子が階段の手摺りを、逆方向から来たこどもと、どちらが離すかでにらみ合いとなる。やはり、勝ち負けを争っているのを見ると、素直な明るい子と思っていたのに、この子もこういう時には穏やかになれないのだな、と発見する。おとなの場合には、たとえば暑いさかりに日陰の細い側道をお互いにゆずり合って、両方とも同じ方向に動いて、おかしく吹き出し笑いをしすれちがってゆくことも多いけれど、案外にらみ合いを利かせて自分を通してゆく人もある。

◇ 郊外などの細い道ですれ違うとき、私は、遠足中に田舎道ですれ違う人に「こんにちは」と言ってしまうのですが、都会でもそれと同じ気分で「こんにちは」と言って通ろうとすると、「あんた誰よ?」と、いぶかしげな顔を向けて、うっとうしそうに体をずらしてすり抜けてゆく人がある。どんな場合でも、細い道でのすれ違いは、やさしい声で一言挨拶を交わしてゆく方が、「あなたの体にぶつかってゆきませんよ」という意志が伝わって必要だと思うのですが、いかがでしょうか。

こんなことを例証し続けてはきりがありませんから、〈初めて出会う人もみんな友だち〉、将来はこんな一言の挨拶のやりとりを、日常化した常識にすることを推奨して、終わります。(2021. 9. 26)

<次回公演予告>

第 121 回定期演奏会 (創立 60 周年記念公演 I)

[日時] 2022 年 5 月 14 日 (土)

[会場] 杉並公会堂大ホール (東京・荻窪)

[曲目] J.S. バッハ作曲 (日本語上演・大村恵美子訳詞)

●カンタータ第 21 番《われは憂いに沈みぬ》BWV 21

●カンタータ第 1 番《あしたに輝く たえなる星よ》BWV 1

●カンタータ第 147 番《心と日々のわざもて》BWV 147

[演奏]

・独唱: 光野孝子 (S)、谷地畝晶子 (A)

鏡 貴之 (T)、山本悠尋 (B)

・管弦楽: COLLEGIUM ARMONIA SUPERIORE JAPAN
(コレギウム・アルモニオ・ス・パリオレ・ジヤパン、略称 ARS)

・オルガン: 室田千晶 ・合唱: 東京バッハ合唱団

・指揮: 大村恵美子

[チケット情報] その他詳細、年明け 1 月中旬に発表予定

<団員募集>

合唱参加者、SATB 各声部若干名

詳細は HP をご参照ください。http://bachchor-tokyo.jp/

■カンタータ第1番《あしたに輝く たえなる星よ》

Wie schön leuchtet der Morgenstern BWV 1

[教会暦] マリアの受胎告知の祝日 (3/25 固定) (他に BWV 182 再演)		
[使徒書] イザヤ 7, 10-16 (メシア誕生の預言)		
[福音書] ルカ 1, 26-38 (天使ガブリエルがマリアにイエス誕生を告知)		
[成立] 初演 1725 年 3 月 25 日、ライプツィヒ		
[歌詞] 台本作者不詳。コラール・カンタータ。基本コラール：Ph. ニコライ Wie schön leuchtet der Morgenstern (あしたに輝く たえなる星よ) (1599)		
【BCH-145】。1) 第 1 節、6) 第 7 節。2-5) 第 2 節から第 6 節までの書換え。		
[上演用訳詞] 大村恵美子 http://bachsmusik.starfree.jp/bwv1.htm		
[編成] 独唱 STB、合唱、ホルン 2、オーボエ・ダ・カッチャ 2、独創ヴァイオリン (vn conc) 2、弦合奏、通奏低音		
[楽曲構成]	訳詞冒頭句/原詞冒頭句	編成/調
1. 合唱	あしたに輝く 恵みと真の妙なる星よ Wie schön leuchtet der Morgenstern	hn2,obc2,vn(c.)2 str.bc へ長調
2. レチターティーヴォ (T)	まことの神の子 いかに麗し Wir eilen mit schwachen	bc
3. アリア (S)	満たせや 天なる神の炎 Er füllet, ihr himmlischen göttlichen Flammen	obc, bc 変口長調
4. レチターティーヴォ (B)	この世の輝き ところに触れず Ein irdscher Glanz, ein leiblich Licht	bc
5. アリア (T)	歌と楽の音もて なれを讃えん Unser Mund und Ton der Saiten	vn conc2, str, bc へ長調
6. コラール (合唱)	げに幸なるかな とこしなえの主に Wie bin ich doch so herzlich froh	vn conc2, obc2, str, bc へ長調
(演奏時間 25 分)		
[上演履歴] 1962 (第 1 回公演)、1968 (#15)、1991 (#69)、2003 (#93)、2018 (#116)、2022 (#121) 予定		
[日本語版楽譜発行] 2003 年「50 曲選」、ISBN978-4-925234-30-7 (¥1700)		
[録音] CD「50 曲選」Vol.1 (2003 年録音、#93)		

第 1 番のカンタータについては、数年前の公演の際に、旧バッハ全集の編集者がこれをカンタータの部の巻頭に置いた理由が分かるような気がします、と書いたことがありました。バッハ自身は、残した作品に後に番号がつくなど思ってもみなかったでしょうが、この《あしたに輝く 妙なる星よ》Wie schön leuchtet der Morgenstern が、その栄えある「一番」に選ばれたことを、あるいは本人も納得するのではないのでしょうか。

暁けの明星 (Morgenstern) は、将来の救い主の輝かしい出現を預言するものであると同時に、印象としては、中世以来の聖母の象徴としての役割も濃いようです。

作品の教会暦「マリアの受胎告知」は、ルカ伝 1 章に集中して書き込まれた、キリスト生誕に先立つ物語のひとつで、この場面を描いたレオナルドやフラ・アンジェリコなど、ルネサンスの名画を思い浮かべる人も多いでしょう。

天使ガブリエルがマリアの前に現れ、「マリアよ、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい」と語りかけた。マリアは戸惑いながらも、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」と天使に答えた、という話し (ルカ 1, 26-38)。

早朝の野外に、先ずニコライのコラールの動機が弦でキラッとあらわれ、すぐに「狩りのオーボエ」とホルンが祝福のファンファーレでこれを引きとる。やがて、ソプラノ斉唱が《あしたに輝く》を、たっぷりゆったりと歌い出し、下 3 声がフーガを細かく紡いでゆ

く……。2 曲のアリア (第 3 曲のソプラノはマリアの至福) を経て、終結は、主題コラールの堂々たるトゥッティ。これぞまさに「コラールの女王」!

拝啓 安曇野閑人様

風岡 和子 (団員)

初めてお便りいたします。

バッハ合唱団月報に連載の「退屈するのはいそがしい」を毎回楽しみに拝読しています。閑人と称されながら、いそがしいというこの逆説に大いに興味と好奇心をかきたてられました。その真意はどこにあるのか少しずつわかってきましたが、ここまでの境地に至るご経験をさらにかがいたくお便りいたしました。

30 年前のパリでも、教会のコンサートのチケットやルーヴル美術館の入場料が、無職の人や職を探している人は無料とありました。この考え方は今も生きていると思います。コロナ発生当時、ドイツのメルケル首相が、金銭的援助はまず文化・芸術にと発言しましたが、相通ずるものがありますね。

フランスでは、日本で言うフランスパン (バゲット) が、誰もが買えるように 100 円に抑えられていると聞いたことがありますし、コロナのずっと前から、決まった曜日に炊き出しがあり、ボランティアの食事サービスを見たこともあります。

日本ではあまり見かけませんが、あちらには乞食 (この言葉は死語でしょうか。それとも人権侵害? ホームレスなら OK? ルンペン? これに近い名の極右の大統領候補がいましたね!) がどこにでもいます。若い人が空きカンを前にして道に座りこんでいるのもよく見かけます。空港や駅で時間待ちをしていると、お金が欲しいと手を出されることがしばしばですが、気軽にポケットから小銭を出して渡す観光客などがいて、それが若い女性だったりすると、「ありえな〜い」とビククリします。

数年前アルザスの小さい町に滞在しましたが、教会のオルガンコンサートはすべて無料でした。扉の前に「お気持ちをお願いします」的な入れものがあり、帰りに聴衆が「おひねり」を入れていました。どんな小さな町にも立派な教会とパイプオルガンがあり、夏の夕がた音楽を聴いてゆっくり過ごすという人々の姿に、毎日の生活に音楽が自然に溶け込んでいるのが感じられました。この小さな町のどこから来たのか、教会はどこでも満員でした。

「教会ではみんなすぐパーッと歌い出すのよ。年齢、性別は関係なし。教えたり教え合ったり、すぐ大合唱」とは、かつてストラスブールに留学なさった大村先生の言葉です。

またお便りいたします。冬支度でそろそろ暖炉のご準備ですね。お元気でお過ごしください。

草々

<連載随想> 退屈するのはいそがしい [10]

雑木林のアルペジオ

安曇野閑人 大野 博人

紅葉は見に行くものではない。むこうからやってくる。

安曇野で雑木林に囲まれて暮らしているとそう感じる。

落葉樹の軽やかな緑や常緑樹の深い緑が、陽光を乱反射していた夏が終わりに近づくと、どの緑もくすんでくる。ヒグラシが去り、スズムシ、マツムシの声に交代するころには、林の低層をおおっていたヤマウルシの葉が少しずつ黄色を帯びる。

それを合図に、林のあちこちが色づきはじめる。サクラ、クヌギ、コナラ……。緑に支配されていた風景の中で、黄色や橙色の領域がじわじわと広がる。

林全体が日に日に輝きを増す。毎朝、窓のカーテンを開けるたびに前日よりさらに鮮やかになっている木々の姿に息をのむ。画家が大作を仕上げていくのを目の当たりにするようだ。

モミジは庭先にも雑木林にも自生している。毎日、装いを変える。眺めていて飽きない。上の方の枝先の葉から黄色が目立ちはじめ、やがて樹の全身に及ぶ。色も少しずつ濃さを増す。橙になってほどなく赤へ。モミジとはいっても種類は一つではない。一本一本で色が変わる早さも色合いもちがう。おなじころ、庭先にまっすぐに立つ4メートルほどのカツラもすべての葉が黄色く染まる。

家のどの窓も外の景色を切り取って一幅の絵になる。窓枠は額縁だ。

しかし、秋の絵が完成したと思うまもなく、ある日、それまでより冷たい風が吹く。

木々を飾っていた赤や黄色、茶色が宙を乱舞しながら落ちていく。文字通り「木枯らし」が、木々から奪った色彩で地面を塗り変える。カツラの枝から離れた葉は、金色の円となって根元に集まる。大きな日だまりができたようだ。

林の中で数も多く、どれもひときわ高いマツは常緑樹だが、秋になると、落葉の量が急に増える。色も形も多様な落葉樹の枯れ葉に重なり、やがてヘビイチゴなどで緑色だった庭先も、家の前のアスファルト舗装の道路もすっかり茶色に染める。

大半の葉を落とした雑木林では、木々の黒々とした幹と枝があらわになる。太くゴツゴツした線や細く鋭い線が空を背景に幾何学的な模様を描いている。地面も急速に色を失い、昨日までの色鮮やかな風景画が、黒っぽい色を基調にした抽象画に変容していく。

紅葉の美しさは「見ごろ」にあるわけではない。止まることのない色彩の変化そのものにあると思う。ひ

■日に日に色を変えていく雑木林のモミジ



とときも目を離すのが惜しいほど、早く優雅な雑木林の変身。

バッハの平均律クラヴィーア曲集の有名なハ長調のプレリュードを思い浮かべる。

同じリズムのアルペジオが続くこの曲のように、木々はずっと同じ姿で立っている。けれども和声は刻々と変わるように、次から次へとはっとするような色の組み合わせを織りなしていく。

あのプレリュードに心を奪われるのは、弾く人も聴く人もアルペジオを伴奏にして、それぞれ自分の歌を重ねているからではないだろうか。グノーが美しいアヴェ・マリアの旋律を乗せたように。

紅葉にひかれるのも、その色の移ろいに見る人が自分の歌を重ねるからかもしれない。雑木林が奏でるアルペジオを伴奏に、過ぎた日々をふり返る。かつて住んでいた街をなつかしんだり、出会った人のことを思い出したり。

秋になると、テレビやネットでさかんに「見ごろ」情報が伝えられる。色づきはじめた山や公園について、見に行くべき絶好のタイミングを教えてくれる。紅葉の名所ランキングさえある。人気のスポットにはたくさんの方が訪れるという。でも、「見ごろ」は変化の中の一場面ではない。

うちの周りの雑木林には、見上げるばかりのモミジの大木があるわけでもなく、燃えあがるような色彩をライトアップする仕掛けもない。けれど千変万化の色彩に浸ることはできる。

紅葉は「見ごろ」だけでは伴奏にならない。歌は紡ぎ出せない。やってきて、去っていくから人の思いを乗せる伴奏になる。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者。写真も筆者)

[編集後記]

当号の巻頭は「それでも新年を迎える」でした。昨日、ブライトコブフ&ヘルテル社の社長さんから、来年の合唱団創立60周年を祝賀するメッセージが届きました。新年号の巻頭を飾らせていただきます。寒くなりました。みなさん、コロナなど召さぬようお気をつけください。